

③ 緑園都市スクールふれあいネット（地域イントラネットの活用）

■松浦 淳

1―はじめに

今日のネットワーク社会では、インターネットの浸透とともにお互いの地理的、時間的な隔たりを越えた交流が可能となつている。このようなコミュニケーションの形態の変化は、従来の人と人とのネットワーク形成にも新しい次元を提供し、自由で幅広い参加を促進する効果があるものと考えられる。

このようなネットワークを地域社会に持ち込んだときどのような効果もたらされるのか。泉区緑園都市地域に地域イントラネット（愛称「緑えんネット」）を構築して行われている民間非営利団体の社会実験に学校が参加し、学校と家庭・地域との連携にこのようなネットワークを役立てることができるとか、モデル的な試みとして行われることとなったのが「緑園都市スクールふれあいネット」（愛称「スクールネット」）である。

2―地域イントラネットの構築

地域イントラネットを構築したサイバー社会基盤研究推進センター（CCCI）は一九九五年に慶應義塾大学と野村総合研究所が共同で設立した非営利組織で、緑園都市地域で

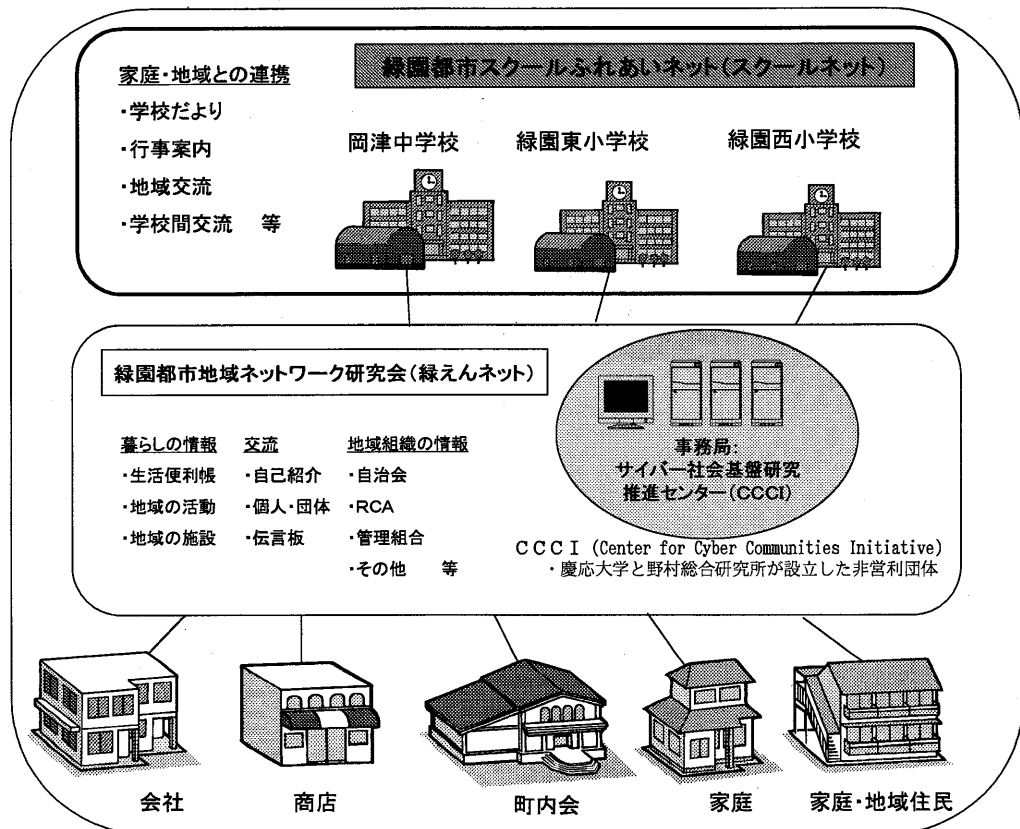
の社会実験には平成十年、十一年の二年間の取組みとして地域イントラネットへの参加を自治会等を通して呼びかけた。

平成十年八月には住民参加による研究会が発足し、地域サーバーをCCCIの事務局に設置し、ネットに加入した住民はこの地域サーバーに接続するという、クローズドな地域イントラネットが同年十月に稼働した。地域の生活に密着した交通機関や行政機関等の情報の掲載とともに、住民手作りのホームページや電子掲示板による住民相互の情報交換などがスタートしたのである。このような地域イントラネットは全国的に見ても例のない先進的な取組みであるという。

この地域を学区とする市立岡津中学校、市立緑園西小学校、市立緑園東小学校もこのネットワークに参加するべく準備を進め、平成十年十二月には、三校のホームページをイントラネット内に公開すると同時に、三校とそれぞれのPTA及び地域住民代表（緑えんネット会員から推薦）からなる「緑園都市スクールふれあいネット協議会」を設立し、CCCIの協力を得ながら様々な実験的試みを推進することとなった。

平成十一年十月現在の緑えんネット加入世帯は約四百世帯であり、ID発行数は約八百

図一 緑園都市スクールふれあいネット ネットワークの概要



- 1―はじめに
- 2―地域イントラネットの構築
- 3―学校の取組み
- 4―学校の現状と教員育成の必要性
- 5―ボランティアとの連携
- 6―今後の展開

人となっている。それに加え、学校関係者は教員・生徒全員にIDパスワードを発行しているため、三校合計で約二千三百人が緑えんネットを利用することが可能となっている。

3 一学校の取組み

① ホームページの開設

インターネットのホームページは世界中に情報発信することができ、誰でもが見ることができるといふ特徴を有している。しかしながらスクールネットにおいては、学校のホームページを見ることができるとは地域住民に限定されているという点が大きなポイントとなっている。

ホームページの効果として、

ア 学校だより等が子どもを經由せずに見ることができると、保護者に確実に情報が伝わる。

イ 多忙な保護者でも、時間があるときにホームページを閲覧することが可能なため、学校の様子を知ることができる。

ウ 小学生を持つ保護者や就学前の子どもを持つ保護者などが中学校・小学校の情報を得ることができる。

エ 学校に通う子どもを持たない地域住民の方も、学校の教育方針や行事などを知ることができ、情報の共有が可能となる。

といったことがメリットとしてあげられる。学校のホームページの果たす役割は、このような地域に向けた情報提供という面が大きいということであろう。

② 学習への活用

⑦ 地域マップの活用

地域情報を書き込める「地域マップシステム」を活用し、地域探検や近隣の遠足の際にデジタルカメラで撮った写真をマップに載せ、発見したことや楽しかったことなどについて児童生徒がコメントを書いている。これらを地域の方がネットワーク上で見て、コメントを入れることにより、地域との交流が行われている。

地域の遊び場や草花など身近な情報を写真付きで載せることができ、地域への愛着を深めるうえで大きな効果を上げている。

⑧ 地域の教育力の活用

地域とネットワークされていることにより、学校の教員以外の方が学習の場に参加することが可能になっている。緑えんネットに設けられている地域の教育力を生かすための「地域に聞こう」システムを活用し、テーマごとにそれぞれ得意分野とする地域住民がボランティア登録をし、児童生徒の質問に答えてくれるものである。また、登録者も少なくあまり活用される場所まではいっていないが、戦時体験などを小学生が質問し、地域の方が答えるなどの例が見られている。

⑨ 電子掲示板の活用

電子掲示板を活用しての書き込みも盛んに行われている。「自己紹介」「何でも伝言板」「アニメ」などの電子会議室の中に子どもたちは自由に書き込みを行っている。この電子掲示板はインターネットにおける会議室と異なり、イントラネットという閉じた空間で行われていることにより、三校の子どもたちだ

図-2 スクールネットのトップページ

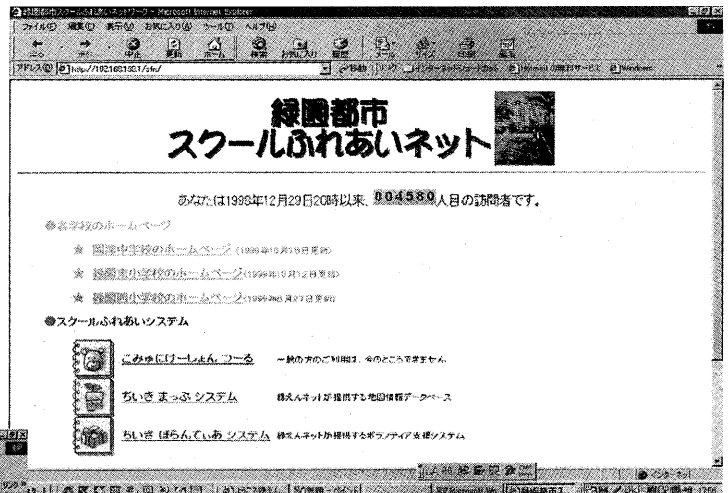


図-3 電子掲示板のメニュー



けの自由な書き込みが可能になっている。それゆえ、なかには相手を傷つける内容を書いたりしてしまうこともあるが、教員が適切な指導をしたり、子ども同士でのやりとりの中で、発言を自主的に消していくなど、情報教育という視点から情報リテラシー育成の貴重な実践の場となっている。

また、電子掲示板は書き込みが容易であることと三校が接続されていることを利用して、学校間での合同授業のような試みも行われている。例として、すでに宿泊体験学習を行った緑園東小学校の児童とこれから行う緑園西小学校の児童同士が情報交換を電子掲示板で行ったことがあげられる。クラス全員が質問をし、何度かやりとりを行うなど、学校間交流の成果が上がっている。個々のレベルでは小学校と中学校の児童生徒間でのやりとりも見受けられる。今後は、このような小・中学校間、また地域との交流も盛んに行われることも期待される。

4 学校の現状と教員育成の必要性

学校におけるコンピュータの活用推進は、今後の学校教育において急激に必要性が唱えられ始めた非常に大きなテーマであるが、現状では、横浜市でもコンピュータを操作できる教員は約半数という状況で、今後の教員育成はハード面の整備とともに急務となっている。

スクールネットの取組みを開始するにあたって、緑園東小学校・緑園西小学校の両校は教育用コンピュータの整備もまだされておら

ず、一からスタートをすることとなった。平成十年度に中学校も含めてコンピュータをそれぞれ十台整備し、緑えんネットへの接続を行うとともに、教員にあつては、コンピュータの操作研修からはじめ、平成十一年度前半までに各校四〜五回の研修を行った。とはいえ、半近くの教員がコンピュータの初心者であり、研修を受けてすぐに使えるわけではなく、まして授業等での活用となると全教員が実施するのは困難な状況といわざるを得ない。

しかしながら、各校では推進役となる教員を中心に、他の教員も徐々に関心を持つようになり、スクールネットを活用したり、コンピュータを使った活動がいくつかの学年に広がり始めている。

5 ボランティアとの連携

今回のモデル事業の中でも一番大きなテーマである学校と地域の連携の部分でもボランティアの果たす役割は非常に大きい。

ボランティア活動との連携については、先にも述べた教員のコンピュータに関する習熟度の低さがかえって幸いとなり、きつかけを作ったといえる。

① コンピュータの設定

コンピュータ十台を緑えんネットに接続するためには、ケーブルの接続からコンピュータの環境設定まで、かなりコンピュータの専門知識を要する作業が生じることとなる。

コンピュータが整備されたばかりの緑園西小学校では、これらの作業を行う際にボラン

ティアの参加を呼びかけた。すでに岡津中学校でこの作業を実施した経験を持つ生徒五人を含め、緑えんネットでの呼びかけに応じた地域の方が参加し、設定を行った。この取組みが、スクールネットにボランティアが関わるきつかけを作ることとなった。

② パソコンクラブ

両小学校でのパソコン活用は、まずパソコンクラブを平成十一年度に新設したところから始まった。児童たちに指導できる教員が十分にはいないことから、両校ではここでもボランティアの参加呼びかけを行った。

両校のパソコンクラブの日程にあわせ、ボランティアのとりまとめをかってでくださった方を通じて、最初の教回が実施されると、あとはネットワークを活用して学校から依頼のメールを出すことになって、ボランティアが参加してくれるようになってきている。

③ 授業参加

岡津中学校では三年生の選択授業の中で、スクールネットを活用した総合学習に取り組んでいる。この授業には最初からボランティアが数人参加し、中学生とともにスクールネットに接続するところから始めている。小学校でも、授業で電子掲示板書き込みを行う際、クラスの保護者も参加している。今のところは、コンピュータの操作をサポートするのが主になっている。

④ 教員との共同作業

児童生徒が学習活動の中で撮影したデジタ

ボランティア活動 (パソコンクラブ)



ボランティア活動 (コンピュータの設定)



ル写真やコメントなどを地域マップへ登録する作業は、量が膨大であることと教員が操作に不慣れであることなどで遅れがちである。このような裏方作業についても、ボランティアからの協力の申し出により、夏休み中の土曜日に学校に集まり、教員への直接的な支援を行った。

5 地域開放用パソコンPR

家庭にコンピュータのない方も、学校のホームページの閲覧等ができるようにモデル校三校には地域開放用のコンピュータが一台ずつ設置してある。学校でのPTA関係の会議等の時に見ていただいているが、緑園東小学校では、土曜日曜の市民図書室の利用者にも見ていただけるよう、ボランティアの方が案内役をつとめている。

本モデル事業では、たまたまコンピュータが学校と地域を結びつける一つの材料となった。スクールネットが両者の連絡をスムーズにするという側面以外に、コンピュータ自体が両者を取り持つきっかけとなっている。現時点では教員がコンピュータの授業での活用を進めていく上で、多様な機能の活用、

動作の安定性の確保等の面で、専門知識を持つもののサポートが必要であることが多い。しかしながら、専門知識はなくても四十人からの児童生徒を指導する際に同じ教室において、操作につまづいた児童生徒をみてもらえただけでも、教員は大いに助かっている。ただし、ボランティアの方々から、事前に学校の機器やソフトウェアに慣れるためにパソコン教室を一般開放してほしいという申し出があったことは付け加えておきたい。

6 今後の展開

今後、ますますスクールネットの活動を充実させるために鍵となるのが、教員の意識改革である。一つはコンピュータ活用の全教員への拡充である。現時点では、コンピュータを扱うことに熟達した一部の教員が多くを背負ってしまっていることは否定できない。全教員に浸透すればもっと大きな広がりのある取組みが期待される。もう一つは、学校を地域に開いていくという意識の定着である。コンピュータやネットワークの利用は地域との交流の一つの手段にすぎず、学校がオープンな気持ちで取り組まない限り、地域の方は学

校にもスクールネットにも入ってこれない。この面では、それぞれの学校において意識の高まりもあり、ボランティアも学校に着実に入ってきている。さらなる拡大に向け、ネットワークだけでなく紙ベースでの呼びかけも行っていい。

地域全員がネットワークに加入しているわけではないので、その活用には自ずと限界があるが、従来の情報伝達手段に加えて、このネットワークを学校と地域との交流のツールとしてうまく活用していけば、ますます多様な学校と地域の連携が生まれるに違いない。

最後に、このようなネットワークが、ほかの地域で容易に構築できるものではないことはいまのところやむを得ない。緑えんネット自体もCCCIの実験終了後の運営については現時点では未知数である。しかしながら、今後はケーブルテレビなどを利用した地域内のLAN構築やインターネットを利用している同様の試みについて、各方面でも研究が進んでいるようなので、近い将来、学校・家庭・地域の連携にコンピュータネットワークが大きな役割を果たす日が来ることは想像に難くない。

△教育委員会事務局情報教育課担当係長▽